

「公事宿裏始末 火車廻る」著者：氷月 葵（ひずき あおい）

公事宿裏始末シリーズ第1弾である。小説の構成は第1章から第9章で、連続した話となっている。

今回の舞台は、公事宿が連なっている江戸馬喰町である。主人公は、勘定役山名行直の一人息子山名総次郎である。総次郎は、道場の師範代を務めるなど文武両道の息子で、平凡に暮らしていた。

【突然襲ってきた出来事で人生が変わってしまった。】

それがある日突然、父がお役金着服の罪で切腹を命じられた。全くの濡れ衣で、それも秋川藩の上層部が仕組んだものであった。藩の刺客が総次郎まで及び理由が分からないまま江戸に向かって逃れるのである。今までの平凡な生活が一変し、山名総次郎の名も改め矢野数馬と名乗ることになった。

【巡り合わせ】

江戸に入り馬喰町をさまよっていた数馬は、公事宿暁屋に泊まることになった。途方に暮れていた数馬にとって、これが自分の人生を変える巡り合せとなるのである。

公事宿「暁屋」の一家は、亭主の喜平と女将の吹、息子の友吉、娘の十三(とみ)、飯炊きの伊助それに用心棒の柿崎佐内の6人である。四カ月後には、数馬はこの一家の仲間の一人に加えられることになるのである。

数馬にとって、今後の生活や、父がなぜ切腹を命じられ、なぜ自分に刺客が向けられたのか、判明しなければと頭を巡らしていた。そんな時、喜平から息子の友吉に書を教えることと、公事の差し紙（訴状）の代筆を引き受けてくれれば宿代を只にすると申出をありがたく受けることにした。地獄に仏である。これをきっかけに暁屋の人々と深くかわりを持つことになるのである。

【秋川藩下屋敷を訪れるきっかけ】

秋川藩の上屋敷を探し、次に下屋敷（前藩主が住む）も判明した。そして、偶然下屋敷で木に登った猫を抱き上げ、七重（江戸家老の娘）に渡した縁で、井上式部と話すことができた。藩邸の内情を聞く数馬に、式部は改めて祭礼の日に神社の参拝の時に会う約束をし、話を聞くきっかけを作った。

祭礼の日、数馬は式部と会うことができたが、お供（七重）がいたため、肝心の話ができなかったが、七重にかかるたの書を依頼され、下屋敷を訪れるきっかけができた。

【一筋縄でなくなった八七の公事の一件と根回し】

一方、暁屋では、柳長屋の大工の八七とおきく夫婦が長屋の名主の息子石田屋長次郎を訴える公事の依頼に訪れていた。大工の八七が借家を建てる仕事の完成後、色々と苦情を言って、大工賃の割引を要求され、ともに支払わないのである。

そんな時、大工の八七がお稲荷さんのほこらに火をつけたと、石田屋の手代の留吉が証言して、お縄になったのである。石田屋の罠である。しかし、八七にはアリバイがありその時刻大工仲間の竹松に会っていた。竹松に証言してもらうつもりであったが、石田屋の手下に襲われ、大けがをして公事に出られなくなった。思わぬ悪党の逆襲にあって喜平は、早く手を打たなければと思い、急いで伝馬町の牢屋敷に入れられた八七を救い出すため、牢名主たちに賄賂を贈ると共に、与力の高岡に根回しをしたのである。

【下屋敷で数馬の素性が明らかとなる】

他方、下屋敷に七重のかるたの書を完成させるため、訪れていた時、偶然下屋敷を訪れていた大目付の善右衛門が数馬と顔を合わせ、山名総次郎であることが分かったため、総次郎は下屋敷を飛び出し逃げた。

その後反望月派の大目付と数馬の従弟の誠士郎は、江戸家老望月の不正と総次郎の扱いについて話し合った。

数馬こと山名総次郎は、前藩主の隠し子であり、ひそかに藩主におす動きがあった。

【火車を廻す】

八七の件であるが、与力への根回しにより、八七は嫌疑不十分で江戸払いとなった。他方、あやふやな証言をしたとして留吉は、江戸十里四方払いとなった。しかし八七は、拷問と牢内での痛めつけて歩くことができないくらい弱った体になってしまった。公事で勝つことができず、罪人となり大けがまで負わされ、公事宿暁屋喜平としては何としてもけじめをつけなければ気が済まなかった。

悪い行いをした者が死ぬと地獄から火車が迎えに来て連れ去ると言われている。後始末を付けると決心した喜平は、腹の底の火車が廻り始めたのである。喜平とお十三、佐内と数馬の4人は、本当の悪党である石田屋長兵衛を訪れ、悪事のけじめとして千枚通しを耳に突き刺し、金でかたをつけてやると金を奪うとともに長屋を八七の女房のおきくに譲る証文を書かせて引き払った。追ってきた手下と息子の長次郎を数馬はみねうちで腕や足などの骨を砕き悪党を退治した。数馬はなにか吹っ切れた感があった。

【反望月派との決別と七重との誓い】

式部からの文により、船宿上総屋の船の中で、話し合いをした。数馬はこの4カ月で、大目付にもはっきり自分の考えを言えるまでに成長した。今後、数馬を藩主にしようとする動きや藩の騒動に巻き込まれることなど全てはっきりと断り、別れを告げた。その数日後、七重と式部が暁屋を訪れた。七重は思っていることを数馬に伝え、お互い新しい人生を始めることを共に誓って別れた。二人とも思いを伝え晴れ晴れとした顔になる。

【新しい人生の始まり】

八七夫婦に新しい生活を始める資金として、石田屋からとった大金と長屋を譲り受けた証文も渡し、公事の一件のけじめをつけた。数馬は、喜平にこの先も暁屋においてほしい旨伝え、皆さんと一緒に仕事をしたいと申し出た。喜平は、数馬には気力があり、その気力があれば何があっても乗り越えられると思った。新しい力が加わったことを喜平は喜んだ。そして数馬の新しい人生が始まるのである。